

文学研究論集第46号 '17・2

論文受付日 二〇一六年九月二十三日

大学院研究論集委員会承認日 二〇一六年十月三十一日

結核、その〈出来事〉以後

——福永武彦『忘却の河』を視座とした
結核表象の変遷——

Tuberculosis, After The Affair.

The Transition of Representation of
Tuberculosis with a Focus on Takehiko
Fukunaga "boukyaku no kawa".

博士後期課程 日本文学専攻 二〇一六年度入学

木 下 幸 太

KINOSHITA Kota

【論文要旨】

本稿では、日本近現代文学における結核表象の変遷の一端を考察するため、福永武彦『忘却の河』をはじめとした諸テクストを比較する。結核の文学表象はスーザン・ソントグや柄谷行人などにより〈死病〉というロマンティックな隠喩としての意味作用を指摘されてきた。しかし、

両者の枠組みは西洋医学制度上の「疾病分類学の指標」として結核を捉えている。そのため、批判対象となっていた〈健康／病氣〉の神学・形而上学的構造からは脱しておらず〈死病〉として意味作用しない結核を捉えられない。〈死病〉ではない結核は生き残った意味を求めさせる心的外傷になる。意味が解体されてしまった以上、見出せない意味をどう位置づけて語るのかが問題となる。〈死病〉として機能しない結核は実存に傷を与える〈出来事〉として捉える必要があるのだ。『忘却の河』は〈結核〉や〈戦争〉、〈家族制度〉による〈対象喪失〉を、それ以後を生きねばならない〈出来事〉の一つとして語っている。つまり、近代文学のモチーフであった〈結核〉を〈健康／病氣〉の構造を再検討させるような、生が傷つく〈出来事〉として可視化させたテクストなのである。

【キーワード】 福永武彦、結核、病、出来事、心的外傷

はじめに

日本近代文学において〈病〉の影響は大きく、特に結核という〈病〉は多く語られてきた。たとえば、正岡子規、徳富蘆花、樋口一葉、堀辰雄や横光利一の作品など、作家自身や身边者の結核罹患経験の影響が色濃く読み取れる作品は数え切れない。

日本近代文学における結核の表象について、柄谷行人は「⁽¹⁾実際に社会に蔓延している」た結核とは「かけはなれ」ている「文学的なイメージにおおわれ」た「意味」としてあったと指摘する。実際の結核菌が持つ感染力以上に、当時の医学的知識や文化的コンテクストによって支えられ

た結核という「意味」ないしは「隠喩」が、「イデオロギー」や「神話」として文学の中に機能している。²⁾つまり、文学においての結核はロマンティックな連想を呼び起こすものであり、「上品で、繊細で、感受性の豊かなことの指標」という「意味」があった。

柄谷は癌が〈死病〉として新たに表象されることで、結核表象の「意味」は解体されると述べる。その理由は大きく二つ挙げられる。

第一に、医療技術・公衆衛生の向上などによって、結核という病が脅威ではなくなったことが挙げられる。言い換えれば、結核が〈死病〉として通用しなくなったことである。

柄谷はスーザン・ソントグ『隠喩としての病³⁾』を援用しながら、結核と癌が隠喩として機能することを確認している。ソントグによれば、結核は〈死病〉のイメージとして西洋の文学で表象されていたが、二十世紀半ばに治療が可能となったことで、もはや〈死病〉のイメージとしては機能せず、その代わりに癌が〈死病〉のイメージを引き継いだ⁴⁾とされる。

そして、第二に新たな〈死病〉として語られる病が癌であることが挙げられる。なぜなら、新たな〈死病〉である癌は結核のように単純な因果関係に当てはめることができないからだ。

近代において結核は、特異的病原論という枠組みで捉えられていた。特異的病原論では、病原菌を原因として、そして病を結果として単純な因果関係に置いて思考することになる。これを柄谷は「一つの「原因」を確定しようとする思想」として「神学・形而上学的」であると述べ、以下のように批判する。

結核は、イギリスと同様に、産業革命による生活形態の急激な変容とともにひろがっている。結核は、昔からある結核菌によってではなく、複雑な諸関係の網目におけるアンバランスから生じている。事実としての結核そのものが、解読さるべき社会的・文化的徴候なのだ。しかし、結核を、物理的（医学的）であれ、神学的であれ、一つの「原因」に還元してしまうとき、それは諸関係のシステムをみうしなわせる。

結核菌を体内に保有するだけでは、結核という病は発病しない。結核病の発病には、生活環境、公衆衛生、栄養状態などの複合的な要因が関わっている。病は病原菌だけではなく、それを囲む諸制度や状況の配置によって生成される。だが、病原菌だけを病の原因として措定することで原因は単純化されてしまう。

くわえて、ソントグ―柄谷は「病とたたかう」などの比喩を批判する。なぜなら、このような比喩は〈病〉＝〈悪〉として神学・形而上学的な意味作用によって、事態を単純化させしてしまうからだ。こうして、特異的病原論によって原因が単純化された〈病〉の表象は〈病原菌〉＝〈病〉＝〈悪〉として比喩的に接続される。

結核罹患者は結核罹患という〈結果〉としての現在から、過去に〈原因〉を見出そうとする。つまり、過去にはなんらかの〈病原菌〉＝〈悪〉との接触があったとして回想するのだ。結核罹患には何かしらの悪い原因が過去にある、と罹患者が罪悪感を生じさせる機会となるために、ソントグ―柄谷は、既存のイメージによって単純な因果関係が内面化され

た結核を「病める自我の病氣」として指摘する。文学における結核は創造性や感受性に富む特別な自我を持つ者としての指標であり、詩人・文学者のステータスとされた。⁽⁵⁾

以上のように柄谷はソングを踏まえ、文学における結核表象を批判し、同時にもはや近代のように結核は表象されえないために、その「意味」は解体されてゆくと述べる。

しかし、論が展開するにつれて癌へと関心が移って行くためか、柄谷は「意味」の解体以後の結核については考察しない。結核についてはソングの論を援用する形で「結核は治療可能となったために、癌がいまや凶々しい隠喩として豊富に用いられている」と述べられるだけである。その論も感染力や、特異的な原因を持たないという癌が特異的病原体論の単純な因果関係で捉えられていた結核に付与された「意味」や「文学的イメージ」を解体するものであると主張するのみである。

また、ソング―柄谷の枠組みへ特異的病原体論によって隠喩として機能する結核が、癌という非―病原体論によって解体されてゆくには決定的な陥穽がある。それは問題となっている事象が将来的に正常になるという〈正常／異常〉の二項対立で病を論じていることだ。両者が批判に用いた枠組みは、かく有るべきである〈正常〉という理念を中心としており、批判対象となっていた〈健康／病氣〉の二項対立に象徴される神学・形而上学的構造から脱し得ていない。

結核が隠喩として意味作用する状態が〈異常―病氣〉であり、意味の解体を経て、結核は隠喩として用いられない〈正常―健康〉状態に至る。結局のところ、ソング―柄谷は〈正常／健康〉である／になるべきと

いう前提で論じているのだ。

本論で考察する対象は、ソング―柄谷が〈正常〉であるとして見過ごした「意味」の解体以後の結核である。隠喩として機能しない結核は、ソング―柄谷の枠組みでは語れない問題がある。

両者の枠組みの陥穽はおそらく西洋の医学的処置による〈治療〉と回復した状態へと向かう〈治癒〉とを混同している点にある。すなわち、身体から病状が消えたとして、その時点をもって病氣が治ったと言えるのであろうかということだ。

クレール・マランは病を負うことの苦痛を「単なる症状としてではなく、混乱をもたらし、奪い取り、傷を与えるような実存的な出来事」であり「疾病分類学の指標としてではなく、患者の経験の中で次第に悪くなってゆく要素」として考えることで、病を「患者の経験全体」として捉えようとする。病を負った身体器官が治療されたとしても、病の苦痛や再発への不安などによる精神的ないしは実存的な体験は、治療後も人の生を傷つける体験として機能する。ソング―柄谷が指摘する「意味」や「文学的イメージ」が解体された結核は、まさに「意味」が解体されたことによって、罹患者が「意味」を見出そうとする病になっている。治療を終えた罹患者に〈なぜ生き残ったのか〉を問う心的外傷として「意味」の解体された結核は機能しているのである。

マランの指摘を踏まえれば、ソング―柄谷が批判しようとする〈健康／病氣〉の神学・形而上学的構造から脱し得ていないのは、結核を西洋医学制度上の「疾病分類学の指標」として論じているためなのである。〈死病〉の隠喩として機能しない結核を考察しようとする場合、身体器

官に現れる〈病〉としてだけではなく、その他の「患者の経験全体」を包括した〈出来事〉として捉える必要があるだろう。

本稿では結核表象の「意味」解体の変遷を考察する。そのために、治療法の確立などから結核が死病ではなくなる昭和二十年代後半から三十年前半を基準として、それ以前／以前における結核表象を比較する。前者の例として近代においてベストセラーになり、結核の「文学的イメージ」を生成した徳富蘆花『不如歸』⁽⁷⁾、後者の例として福永武彦『忘却の河』⁽⁸⁾をはじめとした福永の諸テクストを検討する。福永は自らも結核が〈死病〉ではなくなった昭和二十年代後半から三十年前半に結核罹患を体験している。その経験は作品や罹患時の随筆などに多く残されており、死病ではなくなったが患者に多大な不安を与え、生を傷つけるものとして機能する結核を考察する際に重要なテクストとなる。

以上、近代から戦後にかけての文学テクストを通して、結核表象の変遷を検討する。

1 〈病〉から〈出来事〉へ——『不如歸』と『忘却の河』の比較から見る〈結核〉の歴史性——

まず、『不如歸』と『忘却の河』における結核表象を比較し、どのような表象の差異があるのか確認する。

『不如歸』の中心人物の浪子は継子との確執や、日清戦争によって軍人である夫の武男と引き離され、最終的に結核によって死んでゆく悲恋の物語である。この悲劇的な物語は発表された明治三十一年から一〇年足らずの間に第百版を重ねるほどの爆発的なブームを起こしたことで知ら

れている。藤井淑禎⁽¹⁰⁾は『不如歸』の物語を構成する要素を「結核・戦争・家族制度」であるとし、それら三要素に共通するのは「みずからの意思を超えた力によって引き裂かれる男女の愛」と「それが必然的に醸し出すセンチメンタリズム」であると指摘した。これらの問題を藤井は「昭和二十年の敗戦まで、あるいは昭和二十年代の結核の治療法確立まで持ち越されたとすれば、『不如歸』という作品の存在意義は永いあいだ失われることなく、読者にとって切実な問題を提示し続けてきたはず」であるとし、作品の主題が影響力を持った時代を〈不如歸の時代〉と呼んだ。つまり、結核が「男女の愛」に亀裂を与える〈死病〉として機能した時期が〈不如歸の時代〉と呼べるのである。

『忘却の河』も書かれた要素に注目すれば〈不如歸の時代〉の物語と表層は変わらない。『忘却の河』の中心人物である藤代は戦前に結核を患い、サナトリウムに入所していた経験のある人物として設定されている。藤代はサナトリウムに入所することで、〈看護婦の自殺〉という物語の中心的話題の当事者である看護婦と出会い恋愛関係になる。しかし、治療後には家族の意向によって縁談が進み婚約することとなり、結果として結婚の約束を反故にされた看護婦は自殺してしまう。この結核罹患時の〈愛〉の体験とその喪失体験が物語全体の基調となっている。

このように、『忘却の河』は結核が〈死病〉として機能する終焉期の昭和二十年代周辺を舞台に「結核・戦争・家族制度」の要素を書いていることから、〈不如歸の時代〉の終焉期を描いた作品であると言える。

だが、〈家族制度〉に苦しみ、〈戦争〉により恋人と引き裂かれ、〈結核〉によって死ぬ『不如歸』の浪子と、『忘却の河』の藤代を短絡的に

同地平へと置き、『忘却の河』を〈不如歸の時代〉の物語の単なる一例であると語ることとはできない。なぜなら『忘却の河』は〈不如歸の時代〉の文学であると同時に戦後文学でもあるからだ。扱う要素が「結核・戦争・家族制度」と表記の上で類似しているだけであり、それらの要素が配置される時代的・社会的文脈が異なっている。

実際、『忘却の河』での結核には、藤井の述べるような「みずからの意思を超えた力」は見出せないものとなっている。『忘却の河』は結核罹患が物語の上で重要な役割を果たすにも関わらず、結核自体についてはほとんど語られない特異なテキストである。『忘却の河』の語り手が語る結核体験はサナトリウムに入所していた時の看護婦との恋愛の記憶であり、結核という病について記憶はほとんど語られていないのだ。

たとえば、同じくサナトリウムを舞台にした物語である『草の花』という福永の作品と比較しても、『忘却の河』には病状や完治するまでの不安な心情など、結核自体への言及はほとんど無い。つまり、結核を罹患することが物語の重要な〈出来事〉であるにもかかわらず、〈病〉自体についての描写がされない。『忘却の河』で語られる物語で重要になるのは、結核罹患によって入所したサナトリウムのなかで看護婦と出会ったという〈出来事〉であり、結核という〈病〉ではないのだ。

このように、『忘却の河』では結核という〈病〉よりも、結核によって看護婦と出会うことで恋愛関係になり、結核治療が終わることで看護婦との恋愛関係が終わったことで罪悪感を抱いて生きてゆくことが重要になる。言い換えれば、結核という〈出来事〉を経て生き残ったことが問題である。結核が〈病〉ではなく〈出来事〉として表象されている点

は、〈不如歸の時代〉の作品と『忘却の河』の差異を生じさせている。

『忘却の河』では結核の他に戦争や家族などの複数の要素に重ねられる。そのため、各要素の問題が深化・複雑化して書かれている。作中において結核は重要な問題であるのだが、それは結核という〈出来事〉によって、その後に複数の出来事が用意されているためである。たとえば、サナトリウムで出会った看護婦との恋愛と彼女の自殺、その後の戦争体験など、藤代が物語現在で想起する記憶は、結核という出来事に端を発したものである。つまりその後に配置された各出来事の契機となるために結核は重要なのである。

『忘却の河』は結核という〈病〉をはじめ、戦争体験や家族の不和も、最重要の問題としては扱わない。『忘却の河』では藤代家における家族問題や藤代の過去における恋愛や戦争体験、幼少期の問題など、位相の異なる〈出来事〉が語り手である藤代の連想によって同地平に接続されながら物語られてゆく。語り手である藤代は結核体験とその他の問題を並列に語りながら、それらが同心円状に共有する問題を浮かびあがらせていくのだ。

『不如歸』をはじめとした〈不如歸の時代〉の文学が「結核・戦争・家族制度」に苦しみながら死ななければならぬ物語であるのに対して、『忘却の河』は「結核・戦争・家族制度」によっても死に至ることの出来ない、つまり「結核・戦争・家族制度」という〈出来事〉以後を生きなければならない物語なのである。

2 死に至らない病——〈結核〉の意味の変容——

では、なぜ〈不如歸の時代〉において「みずからの意思を超えた力」のモチーフであった結核が戦後において変容したのだろうか、言い換えれば、なぜ〈結核〉が〈病〉から〈出来事〉へと変容したのだろうか。その理由は戦後において〈結核〉はもはや死の隠喩としての強度を持たなくなったことが大きい。福田眞人⁽¹⁾によると、結核は近代文学において「若く美しい者が青白く死ぬといったものから、才能ある者が夭折するといったものまで一種独特の甘美なイメージが形成され、徐々に強固なものになっていった」と語られてきた。

福田によれば、結核は一九四四年まで、どのような薬・療法も決定的な効果を結核に対して持ちえなかった。その後、特効薬ストレプトマイシンが発見されるが、一般の病院で比較的安価に手に入るようになるのは一九五〇年（昭和二五年）以降のことであった。そしてストレプトマイシンの普及と同時期に、戦争終結による社会不安の解消や健康への関心が注がれ始めたことも相まって、結核による死亡率が急激に減少したという。

これを踏まえば、藤井の引用で確認したような「結核・戦争・家族制度」の三要素が構成する〈不如歸の時代〉の物語が強度を持ちえたのは、特効薬ストレプトマイシンが日本で普及し、決定的な治療法が確立される以前の〈結核〉という言葉が死に至る病の隠喩として機能しえた時代、つまり結核が死を美化する装置として機能した時代までであると考えられる。

死に至る病であるからこそ、いずれ来る死を受け入れるために、福田の言葉を借りれば「恐怖し萎縮するよりむしろ何か非現実的なものへ、あるいは夢想的・幼児的世界へと逃避⁽¹²⁾」することが結核への対応手段として考えられた。

ところが、〈死に至る病〉を意味していた結核という病は、戦後において治療法が確立することで〈死に至らない病〉に変容した。〈死に至らない病〉である戦後の結核は幻想への逃避・ロマン化が困難になる。罹患者は将来的に治癒するかもしれないという希望を捨てきれないからだ。結核のロマン化とは、死にゆく人が死を受け入れてゆく振る舞いであるが、結核が死に至らずに治癒する可能性がある病となってしまうた時、死を美的に語ることで、幻想へ逃避しようにも、可能性として残された生という現実を捨てきれない状況に患者は置かれる。到来が遅延された希望は、現在の陰惨な状況を再認識させ、精神を疲弊させる役割を果たすのだ。

実際に昭和二十年代の約六年間（一九四七～一九五三年）を結核療養に費やした福永武彦は〈死に至らない結核〉に対しての苦しい印象を書き残している。サナトリウムで療養していた昭和二七年五月に発表された随筆「病者の心」⁽¹³⁾において結核は身体ではなく精神を死に至らしめる病として捉えられている。

結核の症状が多少とも回復し、希望が明かに芽生えてもいい時に、かえって言いようのない孤独が病者を押しつぶすことがある。彼が療養を始めた時の目的は、次第に達成されようとしている。

が、果たして治り切るか、また肉体は治ったとしても、この精神の傷痕は治り切るか、……そして果して「治る」とは何であろう、病気とは何であろう、と彼は考え始める。(……) 自分は生きるに値いする、だからきつと治る筈だ、——それが前には、彼を支えている論理だった。今は、生きるに値いするとは、何という不確かな言葉だろうか。ただ生きている、——空しく。そして彼は限りもなく孤独である。

このような状態、それは一つの精神の死である。

医学的発達や社会環境の向上などによって、死亡率が低下してゆくことで〈身体〉ではなく〈精神〉が傷つく病として結核は表象されてゆく。これはもともと死亡率の低い病では起こり得ない現象である。今まで死病であったがゆえに〈治るか、否か(生か、死か)〉という問いが生まれるのだ。

また、たとえ治療を終えて病死の危機から抜け出したとしても「精神の傷痕」は治癒せずに残る点が死に至らない結核の特徴である。まさにマランの言う「混乱をもたらし、奪い取り、傷を与えるような実存的な出来事」⁽¹⁴⁾という、〈出来事〉としての結核が表象されているのだ。

死への恐怖は相乗的に生きる希望や意味への欲望を生むが、サナトリウムという患者が他者と隔離された空間で発見できるのは生きる理由が見つけられないことへの空しさと孤独だけであり、それらが「精神の傷痕」として表象される。戦後の死に至らない結核は自分に孤独感や無力感を意識させる機能を持つ。孤独感や無力感から生じるという「精神の

傷痕」は生きることの空しさ、もしくは「生きるに値いする」か疑問視することで、その後の生にとって心的外傷として機能する。

3 実存的体験としての病——結核から見る『忘却の河』の同時代性——

結核は死に至らない病に変容することで、死なないで生き続けている状況を意識させ、〈なぜ生きるのか〉という実存的な問いを与える。『忘却の河』は結核という文学的モチーフを近代から引き継いできたことに加えて、この作品が戦後文学であることを踏まえると、近代文学のモチーフの一つである結核が戦後文学の特徴として挙げられる実存主義的な問題意識へと変容していったことが考えられる。

本多秋五⁽¹⁵⁾は戦後文学の特質の一つとして「実存的体験」を根底とした「実存主義的傾向」を挙げている。本多によれば「実存的体験」とは「転向」や「俘虜」などの敗戦に付随する体験に共通した「どんな観念も思想も「便所の落し紙」にすぎない、この自分が生きて行く上の支えとしてのむに足りない」と覚る、絶体絶命の窮地に立たされる体験」もしくは「どんな真理も真理でない、自我という針の目をくぐらぬかぎり、それは人間的真理にならない、と覚る体験」のことを指す。つまり、今まで個人を認識する際の世界観を形成していた信条やイデオロギーなどというものが崩壊し、個人が個人なりの世界観を構築し語らなければならぬ状況に戦後文学は直面していた。

また、戦後文学のテクストを参考にしながら「実存主義的」問題意識へと生成した各モチーフを確認すると、たとえば「実存主義的傾向」を

生成するモチーフの一つに、自己否定による身体感覚の変容が確認できる。福田和也⁽¹⁶⁾は戦後派の作家である椎名麟三『自由の彼方で』⁽¹⁷⁾の冒頭の場面を例に「戦争を挟むことで『身体』の捉え方が変わってくる」と指摘する。

これが山田清作という、僕の少年時代の写真である。だが、この写真が僕であるということに対しては、厳粛に拒絶せざるを得ない。僕は、この写真にだけではなく、僕の一切の過去の写真に対してそうなのである。それらは、いずれも犯罪と死の影をもっているからだ。あの殺人現場に残された死体写真に通ずる嫌悪をもっているからだ。たしかにこの少年は、明らかに僕ではない。僕の死体なのである。滑稽な、消え去ってしまった僕の死体なのだ。⁽¹⁸⁾

主人公の山田は過去の写真に写る自分の姿を「死体」と形容する。福田⁽¹⁹⁾はこの「死体」という感覚に飛躍して「いる場面をもとに、戦後文学は戦前よりも顕著に『身体と精神の乖離』が問題になると述べる。福田は指摘のみに終わるが、この身体感覚の変容とは過去の自分の否定であり、その過去に繋がる現在の自分の否定である。つまり、『身体と精神の乖離』とは身体感覚の問題ではなく、〈身体〉もしくは物質・肉体としてのみ残っている〈私〉をどう捉えるかという精神の問題である。

言い換えれば、〈精神〉と〈身体〉における〈私〉の不一致についての苦悩であるため、「身体と精神の乖離」とは自己否定のヴァリエーションの一つと言える。

たしかに、椎名麟三『自由の彼方で』発表前後の他作家の作品を考慮すると、福田が述べるように戦後文学の多くの作品は、自分の〈身体〉と〈精神〉との不一致や、自己否定・罪障意識が主要なモチーフであったことが分かる。椎名の他に、たとえば『自由の彼方で』以前に発表された武田泰淳「審判」⁽²⁰⁾や野間宏「顔の中の赤い月」⁽²¹⁾など、そして福永武彦『草の花』・『忘却の河』にも自己否定感（罪障意識）が繰り返し表象される。敗戦から約二年後に発表された武田泰淳「審判」と野間宏「顔の中の赤い月」の両作品では敗戦による罪障意識が明確に表れている。

日本人、ことに上海あたりに居留していた日本人は、もはやあきらかに中国の罪人にひとしい。中国ばかりではない、世界中から罪人として定められたと言ってよかった。戦争に負けて口惜しいと想うよりも、私は生まれてこのかた経験したことのないほど、あまりにもハッキリと、世界における自分の位置、立場をみせつけられ、空おそろしくなるばかりであった。(……)「これからは憲兵も領事館警察もない。自由なもんさ」と言う友人の言葉もうなずけるとしても、歴史とか伝統とかが眼前に崩壊し、世界とか宇宙とかが、突然自分の周囲にたちはだかった驚きを、その言葉で始末するわけにもいかなかった。⁽²²⁾

何事も忘れやすく、最初から自分の感情を軽蔑する私ではあったが、敗戦のあたえた苦しさ、悲しさだけは容易に去らなかった。それにおさえつけられ身動きできない自分がみじめで、何とか身動き

した、せめて考えの上だけでも身動きしたい、救われたいの一念であつた。⁽²³⁾

引用した武田泰淳「審判」から読み取れる敗戦の影響は三点ある。一つ目は自己否定感、二つ目は戦前の体制によって支えられていた「歴史とか伝統とかが眼前に崩壊」したことによる解放・自由の感覚、三つ目はその解放・自由を得たことにより「世界とか宇宙とかが、突然自分の周囲にたちはだかった驚き」を示し、価値基準となるものが消えてしまったことへの戸惑い。このように、〈敗戦〉を単なる解放や自由の到来とだけ捉えるのではなく、今まで捉えていた世界／世界観の崩壊の出来事として捉えている。つまり、解放（どのようにでも私は生きていく）、歴史や伝統などといった大きな物語の喪失による自由の刑⁽²⁴⁾（ではどのように私は生きれば良いのか）、自己否定感（どうして私は生きていくのか）という、規範の喪失が読み取れる。

また、その直後に発表され、福永と共に雑誌『近代文学』の同人でもあった野間宏「顔の中の赤い月」も同様に戦争を経て、生き残ったことへの罪障意識が確認できる。登場人物である北山年夫と堀川倉子との会話にその様子は明確に表れている。

「あなたこの間、何かをみつけると言っていたの、みつきりそうなんですの。」

「さあ、そう簡単にはね。でも、僕はまた勉強をはじめました。働しながら、勉強する気持がでてきたのです。いつか、僕のようなも

のでも、いい人間になれるでしょう。いい人間になって、死にたい、そう考えているのです。」

「……………」

「あの戦争を通して生きてきたんですから。そういう生き方ができなければ、死んでいた方がよかったようなものです。」⁽²⁵⁾

戦争を生き抜き、戦後に生きる北山は「いい人間」になりたいと言うが「そういう生き方ができなければ、死んでいた方がよかった」と、現在の自分は「いい人間」になろうとする人間、つまり、今は「いい人間」ではない人間であると否定的評価を下す。自己否定を前提としているからこそ、「いい人間」になろうとするのであり、また「いい人間」にならずに今のままであるなら「死んでいた方がよかった」と否定的に語る。

これらの戦後派の作品に見受けられる自己否定のモチーフは『忘却の河』の中でも多く書かれており、その場面を見つけるのは容易である。

藤代は主に三つの位相の時間から自己否定の意識を見出していることが分かる。その時間とは母親の言葉を聞いた幼少期、看護婦の自殺を体験した青年期、戦友の死を体験した戦中である。

たとえば、一章において藤代が自分の従軍体験を語る場面が最初に描かれる自己否定の場面である。藤代は妻を残して戦地で死んだ戦友の代わりに自分が死ねば良かったと語る。

（引用者補足…藤代のことだが「私の友人」の話として語っている）

本当は戦友の方が、つまりこの奥さんの亭主の方が、目出度く復員して幸福に暮すべきだった。そいつが還ってさえ来れば、この奥さんも丈夫だったかもしれないし、この家ももっとましな暮らし向きがたっていただろう。しかし私の友人の方は、生きていても死んでいても同じような、つまり魂の抜け殻みたいな奴で、家族に対しては無関心に愛情らしいものも持っていなかったのだ。どうしてそういうふう、人の運というのはあべこべになるんだか。

この場面で、藤代が戦友の代わりに生き残ったことで罪障意識を抱え「魂の抜け殻みたいな奴」と自称することに注目するべきだろう。「魂の抜け殻みたいな奴」と呼称することにも、椎名麟三『自由の彼方で』の場合と同じく「身体と精神の乖離」が確認できる。野間宏「顔の中の赤い月」に確認できる戦争を生き残ったことに対する罪障意識は、魂と精神の否定へと繋がり、魂と精神を失った身体のみが残っている存在として自分を捉えるに至り、椎名麟三『自由の彼方で』で確認できる「身体と精神の乖離」というモチーフを同時に生成させてゆくことが、先の『忘却の河』の引用から考えられるだろう。

だが、敗戦体験だけではなくサルトル受容⁽²⁶⁾の可能性を考慮すれば、実存という大きな問題系の一つとして罪障意識、「身体と精神の乖離」が福永のテクストには描かれていると考えるべきであろう。藤代は別の場面でも罪障意識を抱える自分を生きていても意味の無いような人間として、つまり精神的に死んでいる人間、死んだような人間であると捉えており、このような自己否定的に語る場面は多数確認できる。同様の自己

否定は、他にも学生運動からの離脱と看護婦の自殺を素材として行われる。

(引用者補足…学生運動から脱落して) 僕はすでに死んだのだ。それにもともと主義に殉じようなんて勇ましい覚悟があったわけじゃない。僕のことを何とでも言う方がいい。君等は節を屈することがなく、君等の主義を守り通して、牢屋の中で死ぬ方がいい。僕は厭だ。僕は生きたい。僕は彼女と共に生きたい。

彼女を殺すことで私も亦死んだのだ、と私は考えた。そして私はそれから三十年も生きて来た。今も生きている。戦争へ行っても死ななかった。戦後の険しい生活も生き残った。罪を感じ、生きていることに何等の意味も見出していないのに、私はこうして生きている。

この場面は、戦前に経験した学生運動からの離脱(実質的な転向)と恋人であった看護婦について想起する場面である。特に後者の引用は、婚約を反故にしてしまったために看護婦を自殺させてしまったと考える記憶であり、物語現在の藤代の自己に大きく影響を与えている。藤代は自分の行いのせいで看護婦は自殺してしまったと考えるがゆえに、「婚約の反故」に「彼女を殺す」という意味を付与して語る。愛する対象を自ら殺してしまったことへの自責の念は、さらに過去の出来事を連想してゆくことで幼少期に聞いた実母の言葉へと接続されてゆく。

私の名前。それにあの時も、という何やら昔の話。困ったねえ、

という母の嘆息。父の声の方は低くて聴き取れなかった。そして不意に、やや甲高い母の声で、いつそ河に流して、と言うのが聞えた。その河という一言で私はぞっとする程怖くなった。何だかは知らないが、それは私にぼんやりとした不気味なものを感じさせた。いや、私は既にその不気味なものの正体に靡げながら気がついていった。(……) えなの流れて来る河。私はそれから決して河のそばへ行こうとしなかった。河を見ることが、途方もなく恐ろしかった。思えば生きていることが罪であるような感じは、もうその頃から、私の心の奥深いところで疼いていたのだ。

この場面は、口減らしのために実の親が藤代を「河に流して」しまおうと考えている言葉を聞く場面である。つまり、藤代にとって、愛してくれていると想定していた〈対象〉が、実は愛してくれておらず、むしろ自分の死なせようとしていたことが分かる場面である。藤代は親という親密な〈対象〉から死を望まれていた存在であることを、幼少の記憶から想起することで、生まれた直後から生きていることを肯定されない存在として自分を捉えなおしている。そのために引用の終りで「思えば生きていることが罪であるような感じは、もうその頃から、私の心の奥深いところで疼いていた」と、物語現在に抱いている自己否定感が幼少期から生じていたものとして語るのである。

おわりに ― 生が傷つく〈病〉 ―

「審判」や「顔の中の赤い月」などの戦後文学と『忘却の河』を比べた時、後者には幼少の記憶に自己否定感の起源を発見する点で差異がある。戦後文学のモチーフである自己否定感を『忘却の河』は個人の来歴にかんする問題として語るからだ。

親に望まれずに育った幼少期、自分のせいで看護婦を自殺させてしまった青年期、戦友の死を体験した戦中期など、位相が異なり本来であれば関連のない出来事の記憶を並列させて、一つの物語として語ることで、語る現在の藤代が募らせている自己否定感の起源を自分の幼少期に発見する。語り手である藤代の語り行為は現在募らせている自己否定感の所以を過去の出来事に発見すること、自己否定感を物語に歴史化する作業なのである。

このように、『自由の彼方で』や「顔の中の赤い月」が戦争体験や敗戦という世界的・ナショナルな要因から自己否定感を見出しているのに比べて、『忘却の河』は自分自身の来歴に自己否定感を見出す点で特異である。〈戦後に生きること〉を「審判」のように〈日本人〉を主体として考えることをせず、また、「顔の中の赤い月」のように〈戦争〉だけを原因として考えることもしない。あくまでも、〈私という個人〉が〈今までの人生〉を生き残ったことが問題となっている。

まとめれば、『忘却の河』は〈結核〉や〈戦争〉を個人的な実存的問題を生成させる〈出来事〉の一つとしてしか語らない点が特徴なのである。

〈不如歸の時代〉の作品は〈結核〉、〈戦争〉、〈家族制度〉が理由にな
って死ぬことで「引き裂かれる男女の愛」を表象する。対して、『忘却
の河』は〈結核〉、〈戦争〉、〈家族制度〉、そして「引き裂かれる男女の
愛」など、同じ要素を踏まえていながらも、それらを経て生きているこ
とが問題となる。〈結核〉や〈戦争〉、〈家族制度〉による〈対象喪失〉
など、いずれを経ても死ぬことができず、生き続けなければならない状
況をテーマとしている。

〈病〉としての結核は先に待つ〈死〉をいかに語るかという未来にか
かわるモチーフであるのに対して、〈出来事〉としての結核は現在の
〈生〉を説明するため過去をいかに語るかという事後性を持ったモチ
ーフなのである。

つまり、〈不如歸の時代〉のモチーフを用いて、『忘却の河』のテクス
トが語っているのは、戦後文学に特徴的な実存の問題なのである。近代
文学のモチーフで戦後文学のテーマを語っているのだ。

結核表象の視座から『忘却の河』を検討した時に分かるのは、近代で
は死の隠喩であり、悲恋の物語を描く要素であった〈病〉を、それ以後
を生きねばならない〈出来事〉として語ることで、〈健康／病氣〉の西
洋医学制度の枠組みが排除してきた〈生が傷つく〉という問題を可視化
させるテクストであるということだ。身体ではなく精神や実存の領域
で、どのような生を求めるのか、〈病〉は問いかけている。

注

(1) 柄谷行人『定本 日本近代文学の起源』、岩波書店、二〇〇四年。

(2) 福田眞人『結核の文化史』、名古屋大学出版会、一九九五年。

(3) スーザン・ソントグ『隠喩としての病い／エイズとその隠喩』、富山太
佳夫訳、みすず書房、二〇一二年。

(4) しかし、柄谷は「癌という隠喩でよばれている事態の方は、それがなく
ならないかぎり、またべつの隠喩でよばれるだろう」と述べており、たと
え結核や癌の治療が可能になったところで「手の施しようもないほど徹底
的に悪いものであることを決めつけるため」の隠喩は「別の隠喩」に移る
だけと主張していることは断っておく。

(5) 前掲の柄谷やソントグの他に、日本近代文学においても結核が文学者の
ステータスないしはファッションとして広まっていたことについては、福
田（注2）が詳しく論じている。

(6) クレール・マラン『熱のない人間』、鈴木智之訳、法政大学出版局、二
〇一六年。

(7) 初出『國民新聞』一八九八年～一八九九年連載。初刊『小説 不如歸』、
民友社、一九〇〇年。

(8) 初出『忘却の河』、『文藝』三月号、一九六三年。「煙塵」、『文学界』八
月号、同年。「舞台」、『婦人之友』九月号、同年。「夢の通い路」、『小説中
央公論』一二月号、同年。「硝子の城」、『群像』一二月号、同年。「喪中の
人」、『小説新潮』一二月号、同年。「賽の河原」、『文藝』一二月号、同年。
初刊単行本『忘却の河』、新潮社、一九六四年。

(9) 盧花全集第五卷、「第百版不如歸の巻首に」、一九〇九年二月二日発表。

(10) 藤井淑禎『不如歸の時代』、名古屋大学出版会、一九九一年。

(11) 福田眞人、前掲書。

(12) 福田眞人、前掲書。

(13) 福永武彦全集第一四卷、新潮社、一九八六年。

(14) クレール・マラン、前掲書。

(15) 本多秋五『物語戦後文学史』、岩波現代文庫、二〇〇五年。初刊単行本
『物語戦後文学史』、新潮社、一九六六年。

(16) 福田和也、『病氣と日本文学』、洋泉社、二〇一二年。

(17) 椎名麟三全集第五卷、冬樹社、一九七一年。初出「新潮」五・九月号、
一九五三年および二月号一九五四年。

(18) 椎名、前掲書。

(19) 福田、前掲書。

(20) 武田泰淳全集第一巻、筑摩書房、一九七一年。初出「批評」、四月号、一九四七年。

(21) 野間安全全集第一巻、筑摩書房、一九六九年。初出『綜合文化』八月号、一九四七年。

(22) 武田泰淳全集第一巻、筑摩書房、一九七一年。

(23) 武田、前掲書。

(24) ジャン・ポール・サルトルは一九四五年の講演「実存主義とはヒューマニズムである」(『実存主義とは何か』、人文書院、伊吹武彦訳、一九五五年)において、神といった超越的他者が存在しない(善悪を確定させる絶対的な価値基準が無い)世界においては「われわれは自分の行いを正当化する価値や命令を」持っておらず「逃げ口上もなく孤独である」と述べる。このように自由ではあるが「自分のなすこと一切について責任がある」状態をサルトルは「自由の刑に処せられている」と表現した。

(25) 野間、前掲書。

(26) 福永武彦は作家として活動する以前からサルトルから強い影響を受けていたことが考えられる。福永は「実存主義文学」という未刊行テキストを残しており、解説の三坂剛によれば、福永自筆の著作目録(収録は『国文学』、学燈社、一九七二年)の昭和二十四年の項に「実存主義的文学——(未刊行)」と記録されていることや「文章そのものの内容(サルトルのマルクス主義への関わりを指摘していないことなど)、特に論じられているサルトル等の著作の刊行年などから推して」このテキストの執筆を昭和二十四年と推定する。全集(人文書院)の編集やそれに収める作品の翻訳(『賭はなされた』、一九五七年刊行)などサルトルにかんする福永の仕事は多いが、昭和二十年代から既にサルトルや実存主義の受容があったものと考ええるべきであろう。福永武彦「実存主義文学」は『福永武彦研究 第二号』(福永武彦研究会、一九九七年)に収録。

※ 福永武彦のテキストは『福永武彦全集』第二・七・一四巻(新潮社、一九八六、一九八七年)に拠った。